

一 橋 大 学 哲 学 会 報

一橋大学哲学・社会思想学会会報 No. 20
(「研究会便り」より通算第48号)

発行者 一橋大学哲学・社会思想学会
発行所 一橋大学哲学・社会思想学会事務局 tel./fax 042-580-8644
〒186-8601 国立市 中2-1 一橋大学社会思想共同研究室内
Email: phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp

URL : http://www.soc.hit-u.ac.jp/~soc_thought/index.htm

第17回一橋大学哲学・社会思想学会

(研究会より通算第47回)

【日 時】 2015年6月13日(土) 10:00 開場

【場 所】 一橋大学 東キャンパス第三研究館三階 研究会議室

【総会】 10:30~11:00

【個人研究発表】 11:00~15:10

11:00~12:00

野末 和夢(本学社会学研究科修士課程)

実証哲学あるいは実証主義における科学/社会:

サン=シモンとその弟子コントから

司会 平子 友長

13:00~14:00

國本 哲史(本学社会学研究科修士課程)

道德の衝突とはいかなる現象か

—ブルデューのHeterarchyという見取り

司会 加藤 泰史

14:10~15:10

鈴木 慧(本学社会学研究科修士課程)

哲学的意味論における文脈主義と相対主義

—不一致の取扱いをめぐって

司会 井頭 昌彦

【講演会】

15:30～17:30

**イスラームにおける主体性の錯綜
——「シャルリ・エブド」事件から考えるべきこと**

鵜飼 哲（一橋大学教授）

【懇親会】 18:00～ はたご屋 会費実費

【目次】

個人研究発表 レジュメ（野末 和夢）	3 頁
個人研究発表 レジュメ（國本 哲史）	4 頁
個人研究発表 レジュメ（鈴木 慧）	5 頁
総会議案書	6 頁
大学院ゼミ研究テーマ（井頭ゼミ）	9 頁
大学院ゼミ研究テーマ（大河内ゼミ）	9 頁
大学院ゼミ研究テーマ（加藤ゼミ）	10 頁
大学院ゼミ研究テーマ（平子ゼミ）	10 頁
大学院ゼミ研究テーマ（森村ゼミ）	11 頁
一橋大学哲学・社会思想学会個人研究発表募集のご案内	12 頁

実証哲学あるいは実証主義における科学／社会
サン＝シモンとその弟子コントから

野末 和夢（本学社会学研究科修士課程）

アンリ・ド・サン＝シモン（1760-1825）およびオーギュスト・コント（1798-1857）が唱えた「実証哲学（philosophie positive）」「実証主義（positivisme）」といえば、日本において代表的なところで哲学方面からは九鬼周造が、社会学方面からは清水幾多郎がそれを体系的に論じた。この点について西洋においては遡れば J. S. ミル、C. ルヌーヴィエ、É. デュルケムなどがいたし、二〇世紀では R. アロンや G. カングレム、F. A. ハイエクの名前を挙げることができるだろう。デュルケムは「十九世紀の哲学史における最も重要な出来事」として「実証哲学の樹立」を挙げ、その業績への「荣誉」はコント以上にサン＝シモンに帰すると述べた。ハイエクはむしろその反対でサン＝シモンに対して思想的独創性を認めなかったし、カングレムが科学哲学上で積極的に評価したのはコントに対してであった。サン＝シモンとコントへの評価を巡る二〇世紀の議論の形がどうであれ、その議論はサン＝シモン思想に対する「ユートピア」（エンゲルス）、コント思想に対する「頹廢」（子ミル）といったネガティブなイメージを幾分緩和したかに思われた。しかし今日の国外研究において多くの論者が評価するのは、十九世紀中葉を通じて流行ったサン＝シモンおよびコント信奉者の思想潮流「サン＝シモン主義」「コント主義」であり、彼ら自身の思想に対する内在的理解にはほとんど向かわない。国内の社会思想史研究においても、ヘーゲルやマルクス、子ミルといった同時代人と比べて、サン＝シモンとコントがおもだって扱われることはほとんどない。また扱われるにしてもサン＝シモンであれば「産業体制論」、コントであれば「人類教」と非常に限定的なテーマに限られることが多いが、両者がこのテーマを体系化した時期はともに後期から晩期である。社会思想史研究にはまだ大きな空白があるだろう。

本発表では、サン＝シモンとその弟子コントによって発明された実証哲学に内在する「科学（science）」の役割と、そこから導きだされる「社会（société）」および社会観を彼らの思想から抽出し、それを報告する。このテーマはサン＝シモン、コントともに前期から中期に一定の完成を見るが、後期・晩期思想の礎ともなった一大テーマである。彼らの学問的営みは、コンドルセ的な歴史哲学の批判的継承を媒介として自然科学の延長線上に社会科学（社会学）を位置づけることから始まり、そこから「社会」を導きだした。サン＝シモンの言う「社会」とはいわゆる「近代社会」（法治国家＋市場経済）ではなく、中世以来の「人間精神の進歩」が反映されたヨーロッパ文明を鏡とする概念となる。コントは「進歩」を象徴する自然科学の発展が客観的世界の拡大と同時に人間の主観的世界を「自我」に押し込め、エゴイズムの煽動・モラルの衰退を引き起こしたことを危惧する。こうした背景の中で、社会科学は「宗教」が形作ってきた主観的世界を新たに買い戻す学問として生まれることとなる。

道徳の衝突とはいかなる現象か
—ブルデューの Heterarchy という見取り—

國本 哲史 (本学社会学研究科修士課程)

個々人の道徳が衝突するという現象を、社会的にはどう捉えることができるか。デュルケームの方法論的集合主義と、ウェーバーの方法論的個人主義を導き手として、ブルデューが示したヘテラルキーへと繋げながら、道徳の衝突を、単に個人間の問題枠組みから、社会制度や集団、組織間へと通用するマクロな視点で考えてみたい。

ヘテラルキーとは一般に、ヒエラルキー内の階層間の関係を問う方法論である。しかし、ブルデューは、多様な価値ヒエラルキーを立て、そのヒエラルキー同士の関係も視野に入れた。例えば、文化資本と、経済資本が挙げられる。ブルデューの言うところによれば、教授や芸術家は文化資本が高い。ポップカルチャーよりも古典芸術を好む一方で、前衛芸術にも興味を示すことができる。文化資本の低いものは、とある写真を見て、取るに足らないと切り捨てたり、芸術はよくわからないと放棄したりするなど、良さを見つけようとしめない。他方、経済資本の上層にいるのは、商業の世界で活躍する人々である。

二つの資本を共に高めている人間はいるだろうが、片方を高めている場合（教授や芸術家になったからといって、経済資本を多く獲得できるわけではないし、成金主義と言われるように、お金を沢山稼いだからといって、それが同時に文化資本を獲得できたということにはならない）には、自分の依って立つことのできるヒエラルキーから、他のヒエラルキーへの闘争が持ちかける可能性がある。

教授や芸術家、貴族などが成金主義や、新自由主義を批判することや、昨今の権力者が美術館や博物館、もしくは人文学系の学科を閉鎖させていく流れなどは、様々な理由があるだろうが、その主要な一つに、自分と異なるヒエラルキーの上層にいる者に対してなされる自身の卓越化を端に発した、嫌悪感が挙げられるだろう。

個々人の善／悪の判断を含む道徳の衝突という現象を、ヘテラルキー的見取りによって眺めることによって、我々がある善さ／悪さを提示する際に考えなくてはならないことが見えてくる。それは、その人々の属しているヒエラルキーとの関係を考えなくてはならないということである。

ただ、この枠組みは問題もある。それは、これらの闘争が可能であるのは、それぞれのヒエラルキーの上層に位置する人に限られるということである。そもそも、どのヒエラルキーでも下層に属しているような人間が、どのように闘争に参加すればいいのか、という問いは放置されたままである。

例えばアメリカ至上主義に対抗して、アジア至上主義のようなものを唱えるにしても、歴史的なアドバンテージを持つイランや中国、現在大国となった日本、韓国のような国を除いた国々がどのようにアジア至上主義を持ちだすことができるのか。せいぜい第三局という、二項対立をずらした形での参加しかできないのではないのか。

学会発表では、こうした内容を先行研究や引用を含めながら精緻に行いたいと考えている。

哲学的意味論における文脈主義と相対主義
——不一致の取り扱いをめぐって

鈴木 慧 (本学社会学研究科修士課程)

近年の哲学的意味論では、何らかの主観的規準を参照してその指示を変えるように見える言語表現 (e.g. 「この飴は美味しい」のような、参照される趣味基準に応じて真理値を変えるように見える趣味的定文) の意味論的取り扱いについて、文脈主義と相対主義の間に論争が展開されている。文脈主義と相対主義は、いずれも Kaplan 的な意味論の枠組みを前提した上で、主観的規準を参照して指示を変化させるように見える言語表現に対して、それぞれ次のような意味論的取扱いを提案する：(a) 文脈主義は、問題とされる種類の言語表現の指示の可変性を、発話文脈への内容の依存によって説明する。すなわち、内容が文脈変化に反応して変化することを通して、指示も変化する、とする。これに対して、(b) 相対主義は、同種の言語表現の指示の可変性を、評価状況への指示の依存によって説明する。この相対主義は、言語表現が発話文脈貫通的に不変の内容を保持し、その上でその不変の内容が評価状況内の諸パラメータの値に応じて様々に指示を変えるとする点で文脈主義と異なる。このように、文脈主義と相対主義とは、同一種類のデータを説明する上での競合する説明方針となっている。

この論争の中で、不一致 (disagreement) は、文脈主義を批判する論脈で相対主義者によってしばしば引き合いに出される現象である。文脈主義的意味論は「この飴は美味しい」「いや、この飴は美味しくない」という談話を「この飴は私の趣味基準に合う」「いや、この飴は私の趣味基準には合わない」という談話と意味論的に等価と見なす。だが、相対主義者である Kölbel や Lasersonn によれば、文脈主義はその結果として、明白に不一致を来しているように思われる談話をも不一致ではないものとして取り扱わざるをえない。それゆえ、Kölbel らに言わせれば、文脈主義は少なくとも幾種類かの言説への適用に際して相対主義に見劣りする。

Kölbel らのこの議論に対しては、すでに次のような反論が案出されている。すなわち、Kölbel らの議論は、正確には《不一致についての Kölbel 流の分析に従えば、文脈主義は直観的に不一致であるように見える談話を、意味論的には不一致でないものと説明せざるをえない》というものであって、この議論は文脈主義の側からするならば、文脈主義を棄て去らずとも、不一致についての非 Kölbel 流の分析を与えることによっても回避可能である、という反論である。

本発表では、以上を踏まえ、(i) 不一致にまつわる言語データは、それ自体として文脈主義への批判材料であるというよりも、むしろ不一致現象の分析次第で多様に分析されうるものであるという上記反論を擁護した上で、(ii) 相対主義の穏健なバージョンが、意見の収束が強く期待される類の言説 (道徳的言説など) における不一致の取り扱いに関して有望である、ということ論じる。

一橋大学哲学・社会思想学会第9回総会議案書

(1) 2014年度の活動報告(前回総会以降)*敬称略

① 研究大会の開催

第15回大会(通算45回)2014年6月7日(土)、研究会議室 参加者 53名

【個人研究発表】

9:30-10:30 橋詰 かすみ 「ジュネーヴにおけるルソーの受容-ピクテ事件とその反響」

司会 山崎 耕一

10:30-12:00 八島朔彦 「ルソーにおける本性的善性論の論争的意義について」

司会 森村 敏己

13:00-14:00 清水 雄也 「社会科学の哲学における自然主義論争を治める

—Steelによる再図式化の批判的検討を通じて」 司会 井頭 昌彦

14:00-15:00 鶴田 陽香 「20世紀初頭の優生学における遺伝論と環境論の連続性」

司会 加藤 泰史

15:10-18:10 【シンポジウム】「ネオ・プラグマティズムの現在」

野家 啓一(東北大学名誉教授)

「反自然主義」としてのネオ・プラグマティズム」

大河内 泰樹(一橋大学准教授)*パネラー兼司会者

「知識の社会性と科学批判—ブランドム、ハーバーマス、ヘーゲル」

井頭 昌彦(一橋大学准教授)

「Pragmatic Naturalism/Sydney Planとその課題」

18:15-18:40 総会 議案了承。 議長 森村 敏己

会則一部改正。「一橋哲学・社会思想セミナー」承認。

第16回大会(通算46回)2013年12月6日(土)、研究会議室 参加者 36名

【個人研究発表】

10:00-11:00 小倉 翔 「認識的外在主義と推論—〈推論がアプリアリに正当化されること〉
という観点から」 司会 加藤 泰史

11:05-12:05 清水 雄也 「因果理論は介入を放棄すべきか—介入主義の意味論的問題」
司会 大河内 泰樹

13:20-14:20 小谷 英生 「ドイツ通俗哲学の興亡—18世紀ドイツ哲学理解のために」
司会 平子 友長

14:30-17:30 【シンポジウム】「公共哲学から公共性の思想史へ—共和主義・市民社会・国家—」
司会 上野 大樹

木村 俊道(九州大学教授)

「宮廷と帝国—初期近代ブリテンにおける「公共性」の原像」

上野 大樹（日本学術振興会研究員）＊パネラー兼司会者

「公共性の範型としての市民社会

—スコットランド啓蒙における「共和国」から「文明社会」への転回の一場面」

植村 邦彦（関西大学教授）

「ドイツにおける〈市民社会〉概念—ファーガソン、スミス、ヘーゲル」

18：00—20：00 懇親会 生協西食堂内にて開催 参加者 19名

② 学会発表者の募集

年2回個人研究発表を募集した。2014年11月に2015年夏大会の発表者、2015年4月に同年冬大会の発表者。

ただし、年度内に前年度の再募集が行われた。2014年5月に募集した同年冬大会の応募者が少なかつたため、8月に再募集した。なお、応募者はすべて採択された。

③ 「一哲学会報」の発行

【第18号】（2014年11月27日発行）

第16回大会開催案内／個人研究発表のレジュメ3本／シンポジウム趣意書、第15回個人研究発表のまとめ3本／シンポジウムのまとめ1本、第17回個人研究発表の募集。

【第19号】（2015年3月6日発行）

第16回個人研究発表のまとめ3本／シンポジウムのまとめ1本、各ゼミの卒論・修論・博論・新M1・D1の研究テーマ。

【第20号】（2015年5月25日発行）

第17回大会開催案内、第9回総会案内、個人研究発表のレジュメ3本、総会議案書、各ゼミ生の研究テーマ、第18回個人研究発表の募集。

④ 総会・幹事会

第8回総会 2014年6月7日（土） 議長 森村敏己氏

第1回幹事会 2014年7月2日（水） 社会思想共同研究室

第2回幹事会 2015年4月22日（水） 社会思想共同研究室

⑤ 渉外関係

特になし。

⑥ 学会ホームページ

院生幹事が担当、管理したが、5月以降、社会思想共同研究室で管理、運営する。

＊会計報告

旧哲学・社会思想研究会から引き継いだ現金（昨年残額4757円）の中から、6月に飲料代とコピー代493円支出、12月に懇親会生協料理不足分1000円を支払い、残額3264円になった。なお、本学

会は学会費を徴収しない。

(2) 2015年度の活動計画

① 研究大会の開催

第17回大会(2015年6月13日)

第18回大会(2015年12月5日予定) シンポジウム予定

第19回大会(2016年6月第1土曜予定)(準備)

② 個人研究発表の募集・・・年2回(11月、5月予定)。

③ 「一哲学会報」の発行(年3回を予定)

④ 会員名簿の整理・管理。

⑤ 次期総会の準備(2016年6月)、及び、次年度の事業の準備。

⑥ ホームページの管理。

(3) 学会幹事の提案

2015年度の幹事として以下の者を提案する。なお、院生幹事の交代、退任等は幹事会で承認する。

*氏名の敬称略。

教員幹事 井頭 昌彦、加藤 泰史、森村 敏己

院生幹事 府川 純一郎、高木 駿、岩田 健祐、小倉 翔、高橋 駿仁、守 博紀

助手幹事 干場 薫

学外幹事 今年度なし

*本学会の教員幹事は、旧研究会から引き継いだ輪番表(2003年3月5日決定)に基づき、負担が公平になるように、交替制で担当することになっている。ただし、輪番表に含める教員については、必要に応じて見直しをする。

	加藤	森村	大河内	平子	井頭	学外
2013年			◎	○	○	小谷氏
2014年	○			◎	○	小谷氏
2015年	○	○			○	
2016年	○	○	○			
2017年		○	○			

◎は、代表幹事を表す。代表幹事1名は、2013年度から導入。

大学院ゼミ研究テーマ

《井頭ゼミ》

氏名	主・副	学年	研究テーマ
南菌 直弥	主	M1	クワインとメタ存在論
市川 英梨	主	M2	行為選択において自己理解が果たす役割
岸 俊輔	主	M2	現代分析哲学における直観の利用の検討
鈴木 慧	主	M2	規範的言説に関する文脈主義意味論の検討
高木 智史	副	M2	統治理論としての福利主義研究
尹 叙軟	主	M2	ウィトゲンシュタインと主体について
小倉 翔	主	D2	分析哲学（認識論）／アプリアリな正当化
魏 偉	副	D2	環境倫理学
守 博紀	副	D2	アドルノを通じた言語哲学・美学・倫理学
清水 雄也	主	D3	社会科学における自然主義と因果性

《大河内ゼミ》

氏名	主・副	学年	研究テーマ
岩田 健佑	主	M1	ヘーゲル『精神現象学』の「観察する理性」について
稲垣 生真	主	M1	フッサール時間論
堀永 哲史	主	M1	ヘーゲル『大論理学』における反省論
市川 裕之	主	M2	ホネット
生田目 理恵	副	M2	アレント
太田 浩之	主	M2	アダム・スミスにおける自然概念
小島 雅史	主	M2	フッサール『危機』書における生世界概念と明証性
吉田 尚生	主	M2	イエナ期ヘーゲル研究
上田 尚徳	主	M2	「ヘーゲル『精神現象学』「A意識」の研究
菊地 賢	副	M2	マルクス『ドイツ・イデオロギー』におけるシュティルナーの影響について
田中 岳	主	M3	ヘーゲル『精神現象学』における「不幸な意識」についての研究。
五十嵐 舞	副	D1	バトラーのクィア理論
日比野 佑香	主	D2	ニュートンとヘーゲル
岩井 洋子	副	D2	ヘーゲル
真田 美沙	主	D2	ヘーゲル
守 博紀	副	D2	アドルノを通じた言語哲学・美学・倫理学

王 燕敏	主	D3	承認論に基づく批判的教育理論の構築 -ホネット承認論の教育哲学への応用-
中島 新	主	D3	シェリング自然哲学
岡崎 龍	主	D3	ヘーゲルの主体形成論
額賀 京介	副	D4	フロム
隅田 聡一郎	副	D4	マルクス
瀬川 真吾	主	D5	ドイツの生命倫理学
横山 陸	主	D5	シェーラーなど
塚越 健司	主	D7	フーコー
色摩 泰匡	副	D8	ヘーゲル

《加藤ゼミ》

氏名	主・副	学年	研究テーマ
上野 大樹	主	PD	共和政の概念史、18世紀英仏比較思想史
瀬川 真吾	副	D5	ドイツの生命倫理学
横山 陸	副	D5	シェーラーなど
王 燕敏	副	D3	承認論に基づく批判的教育理論の構築
魏 偉	主	D2	環境倫理学
小倉 翔	副	D2	分析哲学（認識論）/アプリアリな正当化
高木 駿	主	D2	カント美学における多元主義
宇田川 千彰	主	M3	ヘルダーの歴史哲学
那波 泰輔	副	M3	「戦争体験」の形成と変容
市川 英梨	副	M2	行為選択において自己理解が果たす役割
國本 哲史	副	M2	道徳社会学
鈴木 慧	副	M2	規範的言説に関する文脈主義意味論の検討
鈴木 学	主	M2	石田忠「反原爆の思想」とカントの道徳哲学
伊藤 茜	主	M1	正義論、特にシュクラーの研究
内藤 希	主	M1	カント哲学における目的論的判断力

《平子ゼミ》

氏名	主・副	学年	研究テーマ
岩田 健佑	副	M1	ヘーゲル『精神現象学』観察する理性
堀永 哲史	副	M1	ヘーゲル『大論理学』における反省論
上田 尚徳	副	M2	ヘーゲル『精神現象学』「A意識」の研究
太田 浩之	主	M2	アダム・スミスにおける自然概念
菊地 賢	主	M2	『ドイツ・イデオオロジー』研究
生田目 理恵	主	M2	ハンナ・アーレント研究

野末 和夢	副	M2	コント、サン・シモン市民社会論
吉田 尚生	副	M2	イエナ期ヘーゲル研究
田中 岳	副	M3	ヘーゲル『精神現象学』の不幸な意識
羽島 有紀	副	D1	マルクスのエコロジー論
岩井 洋子	主	D2	ヘーゲル
真田 美紗	副	D2	ヘーゲル『大論理学』における量論
日比野 佑香	副	D2	ニュートンとヘーゲル
岡崎 龍	副	D3	ヘーゲルの主体形成論
坪光 生雄	副	D3	チャールズ・テイラーのカトリシズム
中島 新	副	D3	シェリング自然哲学
隅田 聡一郎	主	D4	マルクスの歴史理論
額賀 京介	主	D4	E・フロムの自我論・疎外論
上野 太祐	主	D5	世阿弥伝書の思想研究、倫理学・哲学教育
宮崎 直美	主	D5	初期ティリッヒ、ブロッホの社会哲学
横山 陸	副	D5	M・シェーラー研究等
川野 美玲	主	D6	ニーチェの「根源的一者」について
府川 純一郎	主	D7	Th.W.アドルノの哲学・美学
鴛淵 泰通	副	D8	「純正」短三和音の本源的内在不協和
色摩 泰匡	主	D8	ヘーゲル

《森村ゼミ》

氏名	主・副	学年	研究テーマ
庄沙智子	主	M1	18世紀フランス史
草柳 貴恵	副	M1	東欧におけるロマ
甲斐 早貴	主	M2	19世紀フランスでの外国人労働者排斥
木口 裕介	主	M2	18世紀イギリスにおける奢侈問題
駒野 泰玄	主	M2	ドイツ中世後期における騎士のステイタス
村山 淳	副	M2	スコットランドにおけるゲール語辞書編纂
高橋 駿仁	主	M2	18世紀フランス神話学
横越 建城	副	M2	16世紀オーストリアの宮廷制度
増永 菜生	主	D1	ルネサンス期イタリアの人文主義と政治
田中 資太	副	D2	スペイン領ネーデルランドの教会改革
八島 朔彦	主	D3	ルソーの思想
橋詰 かすみ	副	D3	ルソーとジュネーヴ共和国
萩田 翔太郎 (留学中)	主	D3	19世紀初頭のイギリスの労働者文化
春山 雄紀 (留学中)	副	D3	18世紀ボヘミアの社会政策

一橋大学哲学・社会思想学会

個人研究発表募集のご案内

2015年4月24日

2015年冬大会の個人研究発表を下記の通り募集します。会員の皆様の日ごろの研究成果の発表の場として奮ってご応募ください。

【募集内容】

- 1) 第18回大会(2015年12月第1土曜予定)の個人研究発表
- 2) 発表形式 Aタイプ: 90分(発表時間45分、質疑応答時間45分)
Bタイプ: 60分(発表時間30分、質疑応答時間30分)
いずれも、任意のテーマ。
- 3) 募集人数 若干名(査読あり)
- 4) 募集期間 2015年6月28日(日) ~ 同年7月13日(月)まで
- 5) 応募資格 本学会会員に限る(会員資格については会則参照のこと)。

【応募方法】

発表希望者は、下記の必要事項を「学会発表申込書」としてA4用紙に記入、募集期間内に学会事務局までご提出ください(メールでの応募可)。

- 1) 氏名・フリガナ
- 2) 所属研究科・学年・所属ゼミ(課程修了者は出身ゼミと現在の所属)
- 3) 発表タイトル
- 4) 発表要旨(1200字以内)
- 5) 発表形式の希望(AまたはB)
発表希望者は、Aタイプ または Bタイプのいずれかの発表時間を選択してご応募ください。ただし、当日のタイムテーブルの都合上、こちらで調整する場合があります。
- 6) 連絡先メールアドレス(メールを使用しない場合は、住所と電話番号)

【提出先】

学会事務局メールアドレス phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp または、下記へ郵送のこと
〒186-8601 国立市中2-1 一橋大学社会学部社会思想共同研究室気付

【連絡先】 ☎042-580-8644 応募結果は8月中にお知らせします。

一橋大学哲学・社会思想学会事務局